

アルコール症の治療を障害するもの 「三つの誤解と偏見」

アルコール症の治療導入を阻害したり、せつかく専門的な治療に参加しても途中で脱落させる最初の大きな要因として、世間のアルコール症に対する3つの大きな誤解と偏見があります。

まず第一の誤解と偏見は、一般の人々がアルコール症に対して意志の弱いだめな人間としてとらえられているところにあります。なぜなら、世間一般の飲酒者はアルコールをごく普通に飲んでいるからです。一般の飲酒者は、アルコール症の人々のように身体をこわしてまでも飲み続けませんし、家庭や職場にあさしつかえるような飲み方はしません。

他の人々は普通に飲酒しているのに、なぜあなたにはそれができないのだ。

これが、アルコール症者に対しての周囲の人々が持っている共通の疑問点であり非難なのです。また、アルコール症者は家庭を中心とした周囲の人々に節酒や禁酒の誓いを自ら宣言したり、逆に約束させられたりするのですが、このような約束はことごとく破られてしまいます。節酒や禁酒の約束をするが結局は守れない。このような繰り返しの中でも、アルコール症者は周囲の信頼を失ってゆくのです。

ある家族の方は、次のように言いました。

「うちの主人は身体を悪くして医者に酒を控えるようにと忠告を受けても、また飲んでしまいます。家族や職場に迷惑をかけ続けても、酒をやめることも接酒することもできなかったのです。

酒にだらしのない、意志の弱い、だめな人間なのです。つまり、人間性がだめなのですね。」

アルコール症者に対する世間一般の評価は、この家族を言葉に代表されています。ところが、このような避難こそが人間にとって最もつらいことなのです。

世間の他の人々が簡単にできることが、あなたにだけできない。これがアルコール症者が周囲の人々から長年にわたって、散々され続けてきた非難です。このような非難に反発しない人間などどこにも存在しないでしょう。

たとえば、次のような非難に人間はどのように対応するのでしょうか。

あなたは、なせオリンピックの選手のように速く走れないのだ。このような非難に対しては、人間は何の反応もしません。特別な人間にしかできないことを自分ができないからといって、別に恥ずかしいことでもありませんし、むきになって言い訳をする必要もなく、心をさわがせる必要も全くないからです。

しかし、アルコール症者が受けている周囲からの非難は、全く種類が違います。

他の人々は普通に（節酒）できているのに、あなただけができない。つまり、世間並みでないだめな人間が。

このような非難に対しては、人間は必ず反応します。なぜなら、誰も自分のことを世間並みでないだめな人間とは決して認めたくないからです。

こうしてアルコール症者は、このような非難に対してむきになって言い訳を試みたり、自分をだめな人間とみなそうとする周囲の人々に敵意さえ抱くようになってしまうのです。

くりかえしますが、世間並みでない人間という評価ほど人間の心を傷つけるものはありません。

アルコール症者が、自分が世間並みの人間であることを証明しようとして、節酒を試みたり専門治療を拒否して自分の意志力で禁酒すると主張するのは、ここにも大きな原因があったわけです。

彼らは周囲の全ての人々から、意志の弱いだめな人間として非難され続け、それに対して反発しています。このような状態におかれた人間にとって、医師だけが例外だとは考えられないのは当然のことです。彼らにとって、アルコール専門の医師にかかるということ自体が自らをだめな人間として決定づけられてしまうように感じるからです。

このようにして、アルコール症の大部分が専門治療を受けることに尻込みをしてしまいます。

アルコール症者は、決して世間で考えられているような意志の弱いだめな人間ではありません。アルコール症の正しい治療は、本人と同時に家族を中心とした周囲の人々も含めて、この病気の正しい知識を身につけることから始まります。

しかし、現実にはアルコール症者に対するこのような誤解と偏見がまだ根強く残っており、このために多くのアルコール症者が正しい治療を受けることさえも拒否しているのが現状です。

さて、このような第一の誤解と偏見のため、アルコール症者は何とか自分がアルコール症にまでなっていないことを、いつも証明したがつているのです。そのためにはアルコール症に対する第二の誤解と偏見が非常に役に立ちます。

第二の誤解と偏見とは、「アル中」という言葉に対して一般の人々が持つイメージなのです。

それでは、このいわゆるアル中のイメージとはどんなものでしょうか。

(イ) 酒に酔って暴力をふるったり、暴言をはいたりして他人に迷惑をかけつづける人、つまり酩酊の上で反道徳的・反社会的な行動の異常を示す人としてのイメージ

- (ロ) 仕事もしないで昼間から酔いつぶれて道端や公園で寝転がっている生活破たん者としてのイメージ
- (ハ) 幻覚や妄想など精神病状態になってしまい、精神病院に閉じ込められている人というイメージ

以上のような姿が、一般の人々が持っているアル中のイメージであることが多いようです。これが第二の誤解と偏見というわけです。

これらのイメージは、アルコール症者に大半をしめている静かなアルコール症、寝型タイプのアルコール症の人々にとって自己のアルコール問題を否認する絶好の材料になります。

静かなアルコール症、寝型タイプのアルコール症については他章で説明しますが、彼らは次のように言って自らのアルコール症を否認します。

自分は飲んでもおとなしく寝るだけで、暴力や暴言はなかった。だからアル中ではない。

自分は家庭も仕事もある。昼間から酔いつぶれて、道端で寝ているようなアル中とは違う。

また、酒乱タイプの人々も同じように、自らのアルコール問題を否認します。

自分は、時には飲み過ぎて暴れたことがあったかもしれないが、幻覚や妄想なども経験したこともなければ、道端で酔いつぶれているような生活破たん者ではない。だからアル中ではない。

さらに、幻覚や妄想などを経験した人すら、この病気を懸命に否定しようとしています。

自分は飲んでも暴れたことはない。

生活破たん者まではいっていない。

あれ（幻覚・妄想）は何かの夢か間違いだったのだ。アルコールのせいでそうなったのではない。

このようにして、世間にひろまっているアル中にイメージは、アルコール症者間に相互の否認のかっこうの材料とされるのです。

意志の弱いだめな人間という第一の誤解と偏見が、彼らを大変苦しめていると同時に、この第二の誤解と偏見は多くのアルコール症者を正しい治療から遠ざけたり、また、やっと治療の場に登場しても自らの病気を認識する機会を失わせ、治療からの脱落を促したりしているわけです。このような人々は、せっかくAAや断酒会に参加しても、自分と違うところをやっきになって探そうと努力して、やはり自分は違うという誤った結論をだしてしまうものです。

アルコール症に対する第三の誤解は、アルコール中毒という言葉自体にあります。

この単純な誤解は、思いのほかこの病気の治療の大きな阻害要因となっているようです。

というのは、アルコール中毒状態になっているのだから、外来や入院治療でアルコールの毒素さえ抜ければ、つまり解毒すれば治る、と考えるアルコール症者や家族が非常に多くみられます。せっかく治療を受けても、この第三の誤解が多くの患者さんやその家族を中途脱落させているものです。

もう完全に酒気はぬけました。身体もよくなり、酒ももう欲しくありません。もう治りました。

このような言葉を、我々医療者は何度となく聞かされています。

中毒という言葉の中という字は、～にあたるという意味です。

つまり、中毒とは読んで字のごとく毒にあたるということです。

フグに含まれているテトラドトキサンという毒素にあたる。鉛や水銀など重金属などにあたる。

本来はこのように、毒物にあたる病気にのみ中毒という言葉は使われるべきでしょう。そしてこのような病気であれば、確かに適切な解毒の治療を受ければ、当然治る可能性はあります。

日本では、アルコール中毒・麻薬中毒という言葉が、一般的に用いられてきました。

しかし、これらは毒にあたる病気ではなくて、自らその薬物に依存する病気なのです。つまりこれらの病気を正しく表現するには、アルコール依存症・麻薬依存症と呼ぶべきです。

くりかえしますが、アルコール中毒ではなくアルコール依存症なのです。言葉というものには、必ず一定のイメージが伴います。アルコール中毒という言葉の持つイメージのためにある、一定期間アルコールを解毒すれば治る、という第三の誤解が、さらにこの病気の治療途中での脱落に拍車をかけているのが現状なのです。

アルコール症の治療に際して、今まで述べてきたような三つの誤解と偏見を正し、アルコール症全体の正しい知識を患者さんだけでなく、周囲の人々も持つことが大切なのです。